

生成AIが生徒の学びに適切な負荷をかけ、 教科学習・探究学習を深める

滋賀県・私立立命館守山中学校・高校

ICT環境を整備し、その積極的な活用を通じてグローバル教育や探究学習を推進してきた滋賀県・私立立命館守山中学校・高校。生成AIの登場は同校の学びのあり方にもさらなる変革をもたらしている。英語科の授業、そして探究に取り組む独自教科「共創探究科」における生成AIの活用について聞いた。

滋賀県・私立立命館守山中学校・高校は、文部科学省「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業（AIの活用による英語教育強化事業）」の採択校として、英語教育における生成AIの活用について、実践を通じた研究に取り組んでいる。2026年1月には同事業の一環として、生徒の声を基に生成AIの活用と失敗事例をまとめた「高校生のためのAI活用事例ハンドブック」（*）を公開。同書においては、生成AIを活用する上で大切にすべき方針を、「新しい技術に考えることを奪われ、使われる人になるのではなく、使いこなす人を育てる」とし、現場のリアルな課題と可能性を提示した。

英語科における具体的な活用方法の

1つは、英文で取り扱われているトピックに関する知識をインプットしてくれる相手としての活用だ。単元の冒頭などで生成AIが行うトピックに関する説明に対して、生徒が英語や日本語で質問することで、トピックに対する期待感を高め、読解に必要な基礎知識を得られるようにしている。

生徒が自分の考えをアウトプットする相手としても生成AIを活用している。具体的には、教師が作成した評価項目を生成AIに事前学習させ、「生徒が自分の力で英文を作成するよう、改善点のみを指摘する」といった設定がされている生成AIに、生徒が話したり、書いたりした内容に対して改善点を指摘させている。生成AIが指摘した内容は教師も端末で確認し、重要

な内容はクラス全体に共有する。

生成AIをインプット・アウトプットの相手として活用するようになって以降、ペアワークやグループワークでやり取りする内容が深まったと、入試広報部主任でAI活用リーダー代表の山内優馬先生は説明する。

「生徒間でのやり取りには他者から学べるよさがありますが、トピックが難しくなると、間違いを恐れてやり取りが停滞することもあります。しかし、生成AIが相手であれば、間違えることへの恐れが少なくなります。生成AIと活発にやり取りする中で、様々な表現に触れながら自分の考えを練り上げ、話すことに自信を持った状態で、その後のペアワークやグループワークに取り組むことができます」

また、生徒が生成AIに英語を教えることを通じて生徒の思考力や英語力を高めるプロジェクトである「育てるAI」に、立命館大学と共同で取り組んでいる。英語が苦手な学習者という役割が与えられた生成AIに、生徒は協働して文法知識を教える（図1）。

学校概要
設立 2006（平成18）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約320人
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、東北大、埼玉大、東京農工大、富山大、名古屋大、滋賀医科大、京都工芸繊維大、大阪教育大、鳥取大、名古屋市立大、大阪公立大などに16人が合格。立命館大、立命館アジア太平洋大に内部進学283人。他の私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ60人が合格。



グローバルコース主任・共創探究科主任
田辺 記子
たなべ・のりこ
同校に赴任して18年目。
地理歴史・公民科。



国際部主任
吉本 恵子
よしもと・けいこ
同校に赴任して19年目。
英語科。



入試広報部主任・AI活用リーダー代表
山内 優馬
やまうち・ゆうま
同校に赴任して11年目。
英語科。

* 成功事例だけでなく、高校生が簡単に陥ってしまうようなよくない使い方事例もまとめている。同校のウェブサイトで開催されている。

生成AI時代 生徒の思考をどう深めるか？

「特定の文法知識がない生成AIが、その文法問題に正解できるようにすることを目指し、生徒はグループで生成AIに文法知識を教えます。生徒の説明が不十分だと『育てるAI』は『もう少し詳しく教えてください』と、正解に必要な事項の説明を生徒に求めます」（山内先生）

「育てるAI」を活用することで、文法が苦手な生徒も、その学習に前向きに取り組めるようになった。また、生徒間で文法事項を教え合うと、間違った理解のまま学習を進めてしまうことがこれまでではあったが、『育てるAI』は正しい知識を生徒に求め続けるため、生徒が間違った理解のまま学習を進めていくことも少なくなった。『育てるAI』の取り組みに熱心だった生徒は、ベネッセが提供する「GTEC」においてスコアの向上が顕著に見られたという。

英語科内では生成AIの活用のメリットとともに、指導上の留意点も随時共有していると、国際部主任の吉本恵子先生は語る。

「例えば、中学校段階では、英単語や英文を筆記する機会を保障するため、紙のノートを使用することを基本とし、指導の要所でアナログな方法も取り入れています。また、英作文や発表スライドなどについては、製作物だ

けを評価するのではなく、生徒に内容に関する質問や自分の意見を問うインタビューストを実施することで、実際の生徒の言語運用力を把握することを英語科では大切にしています」

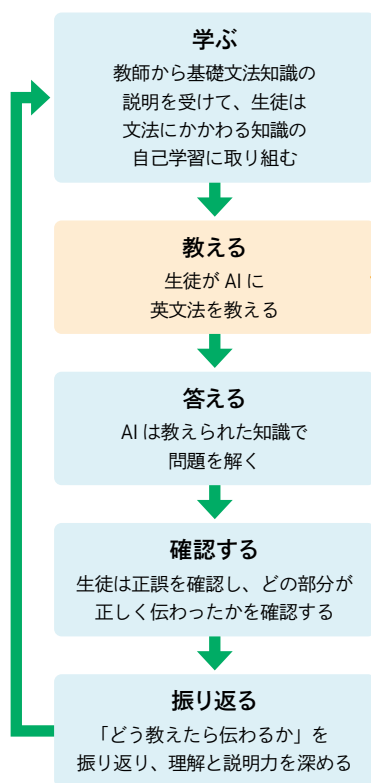
生成AIの登場で英文和訳や英作文などが簡単にできるようになっているからこそ、生徒が英語を自分の力で運用する場面を確実ににつくっていくことが求められると、吉本先生は指摘する。「重要なのは、学力向上に結びつくような、生徒に適切な負荷がかかる学びが実現できているかどうかだと思います。今後も英語科では、各教師の実践を共有しながら、よりよい指導方法を追求していきたいと考えています」

生徒の探究学習をいつでも支えてくれる生成AIボットを開発

同校の独自教科「共創探究科」を担当する田辺^{たなべのりこ}記子先生は、探究学習における生徒の伴走役としての生成AIの活用を研究している。同研究は、探究学習で生まれた生徒の疑問や悩みに、教師は必ずしも生徒の希望するタイミングで対応できるとは限らないという問題意識から始まった。

「例えば、自分の好きな『食べること』を起点に探究する課題を設定しようと考えている生徒がいるとします。フー

図1 生徒が生成AIに英文法を教える「育てるAI」



■生徒が生成AIに教えた内容例

関係副詞「how」は、方法を表す副詞です。副詞は動詞を修飾します。動詞を修飾するとは、動詞の意味をより詳しく説明したり、限定したりすることを指します。具体的には、動詞の動作や状態がどのように行われるか、どの程度行われるか、いつ行われるかなどを表す言葉をつけることです。

先行詞は「the way（方法）」ですが、「how」または「the way how」のようないい方は一般的にしない。これは、「the way」と「how」どちらも方法や手順を表す単語であり、重複して用いる必要がないからです。

以下の文章を見てみましょう。

I like how she sings.
I like the way she sings.
彼女の歌い方が好きです。
上記のように「how」もしくは「the way」だけで成り立ちます。

(例文)

I don't know how he built this house by himself.
どのように彼がこの家を自分で建てたのかは知りません。
I like the way he thinks.
彼の考え方が好きです。
I'm not sure how that way works.
その方法がどのように機能するのかは定かではありません。
I think that the way he acts is a bit childish.

~~~~~  
This is the way I do.  
これが私のやり方です。

※学校資料を基に編集部で作成。

ドロスや貧困といった社会問題はすぐに思い浮かんでも、自分の得意なことや進路の目標などと結びつけながら、その問題を自分事化し、解決に貢献できるようなアクションを見いだすことは容易ではありません。そのため、教師との対話で深掘りすることが重要になるわけですが、生徒が希望するタイミングで教師が必ず対話することがで

きるかという点、それは物理的に難しいのです」

そこで自分の探究が停滞することを嫌い、教師の代わりに生成AIに相談する生徒も少なくないが、生成AIから得られるアドバイスは安易なものが多いと、田辺先生は語る。

「例えば、フードロスを解決するアクションとして啓発ポスターの作成を

## 図2 探究学習における教師ペルソナ型生成AI「たなベボット」

「転生ものの小説やアニメが好きです。みんなも興味があるのなら、転生もののストーリーを誰かの問題、社会問題の解決に役立てられないかと思いましたが、アイデアが浮かびません」



### 一般的な生成 AI の回答 (要旨)

- ①キャリア・進路支援：「人生2周目」思考の活用
  - ・テーマ案「転生小説の『強くてニューゲーム』構造を応用したキャリアシミュレーションプログラムの開発」
  - ・解決のアプローチ
 

「もし今の知識のまま中学生（あるいは小学校低学年）に戻ったら、どんな選択をするか？」を具体的に書き出すワークショップを作成・実施。客観的に自分の過去を振り返ることで、現在の自分の強みや「本当にやりたかったこと」を再発見できる教育ツールとして提案。
- ②高齢者・認知症支援：回想法と「異世界転生」
  - ・テーマ案「高齢者の人生経験を異世界知識として捉え直す『回想型コミュニケーション』の提案」
  - ・解決のアプローチ
 

高齢者が持つ昭和・平成の知恵や職人技術は、デジタル化された現代や若い世代にとっては「異世界のチート知識」と同等です。高校生が高齢者に「昔の暮らしや工夫」をインタビューし、それを「異世界転生風の物語」に再構成してプレゼントする、あるいは地域で共有する取り組みを企画します。高齢者の生きがい創出や世代間交流につながります。

※このほか、「転生作品の構造を活用した、地元の隠れた資源の再掘り起こし」「転生ブームの背景分析と、現実社会における『自己再定義 (Re:Start)』手法の考察」などを提案。

※学校資料を基に編集部で作成。

### たなベボットの回答

- ▶転生アニメ・小説の流行を社会問題の解決に応用したいが、具体案が出ず停滞中。
- ▶指摘メモ：目的（社会問題の解決）に対して「転生もの」という手段のスケールが大きく、具体化のステップが踏めていません。視点を「読者（相手）」に切り替えましょう。
- ▶「転生」の本質は「今の知識を持ったまま、別の環境でやり直すこと（疑似体験）」です。社会問題の解決に使うなら、課題当事者の立場を疑似体験させるエンタメ作品を作るか、既存の課題を異世界に見立てるアプローチが有効です。まずはターゲットと課題を絞り込む必要があります。
- ▶ Next Action
  - ・解決したい「社会問題」の候補を3つ挙げる（例：食品ロス、高齢者の孤立、地域の観光衰退など）
  - ・上記の候補を、本日 20:00 までにこのチャットに送信する

思いついた生徒が生成AIに相談すると、生成AIは『それはよい解決策ですね』などと肯定的に評価します。しかし、本来は生徒に対して『その方法でどのくらい問題が解決すると思う？』『目〇〇満足にとどまっていな

い？』といった声かけが必要です。そこで、探究学習において生徒をよりよく悩ませ、生徒をいつでも支えてくれる生成AIベボットを私たち教師でつくろうと決意しました」（田辺先生）

答えがすぐ手に入る時代だからこそ、生徒に考えさせ続ける

田辺先生は25年4〜10月に、田辺先生と生徒との探究学習に関する対話を、生徒に許可を得た上で録音。10時間以上の対話の記録を、「共創探究科」担当の同僚の教師が生成AIに分析させた。その結果、田辺先生の生徒への向き合い方には、「目的と手段のズレを率直に指摘する」「状況に合わせた具体的な解決策を提案する」といった特徴があることが分かった。そうした特徴を学習させた、生徒の相談に回答する教師ペルソナ型生成AI「たなベボット」を開発。校内研修会を経て、26年4月から、課題の設定の伴走役として試験的に運用を開始した。7月までの約3か月で8割近くの生徒が活用した。条件を設けなければ生成AIはすぐ答えを提示するため、生徒は自分で思考を深める機会を失ってしまう。しかし「たなベボット」は、「あなたの言っていることは、こういうことですよね」などと生徒の話を受け止めながら、「この部分が足りません」「解決したい問題を明確にしましょう」などと、生徒が考えるべきことを、いつまでに考えるべきかといった期限とともに提示する（図2）。

「たなベボット」を使った生徒からは、「場所や時間を選ばずに相談できてよかった」「先生との対話の時間が来るのを待っている間に『たなベボット』を使ったら、課題の設定が少し進んだ」「自分が何にモヤモヤしているのかを『たなベボット』が言語化してくれて、次に何をすればよいのかが明確になった」といった声が上がった。一方で、「たなベボット」にはない田辺先生のよさとして、「厳しい指摘であっても生徒が受け止められるように、明るい表情でそれを伝えてくれるところ」「生徒の性格やこれまでの経験などを踏まえて相談に伝えてくれるところ」「田辺先生のネットワークによる人や機関の紹介を通じて、生徒の興味・関心と社会を接続しようとしてくれるところ」などを挙げた。そうした生徒の声から、「生成AI時代における教師の役割」がより明確に見えてきたと田辺先生は語る。

「こうするといよいよ」と答えを与えた方が、教師は手間がかからないですが、生徒も楽だと思いますが、それでは生徒の思考は深まりません。生成AIからすぐに答えが手に入る時代だからこそ、手間をいとわずに生徒に考えさせる働きかけを続けることが教師に求められているのだと思います。そしてそれは、生徒も求めていることなのではないでしょうか」